[redacted]

# 英語教育

ENGLISH CLASSWORK

Vol. 61　No. 1　2009

主幹　佐野 正之

## 巻頭言

## Change!　Yes, We Must!

横浜国立大学名誉教授●佐野 正之

**日本の大学生の英語力**

ある学会の紀要論文を読んで驚いた。日本の大学生の平均的な英語力は,「ヨーロッパ共通参照枠」に基づくテストで判断すると,「聞く力」は小学生なみ,「読む」「書く」は中学生なみだという。この不振は，どこに原因があるのだろうか。

1）学習指導要領は「コミュニケーション能力」を目標としているが，実情は「受験のための英語」が主流であり，使える英語力を育ててはいない。

2）授業時数，クラス・サイズなど，現場のニーズを無視した教育行政によって，教員は生徒や教材に向き合う時間さえなく，結果的に弱者切り捨てで終わっている。

3）教員養成の問題。教員資格の基準がなく，必要な英語力，授業力，授業改善力，さらには人間的資質の十分なチェックがないまま，資格が与えられている。

などなどである。現状が続けば，まさに，亡国の危機である。

**フィンランドに学べ**

こう主張するのは,「学力世界一」という成果に便乗しての話ではない。フィンランドは，アメリカを中心とした経済の自由競争をあおる国際化に対応し,「もう一つの国際化」を主張し，人権，文化，環境など人類共通の価値を守る運動の中心であり，この哲学に基づく教育立国に成功したからである。外国語教育に関して言えば，多文化と共存・協働する学力，intercultural communication competenceを目標に置き,「考える」「対話する」「協働作業」「書く」を重視した，task-basedの指導が徹底している。だから，フィンランドを訪れる旅行者は，国民の高い英語力に驚かされるという。

フィンランドの成功の理由はいくつかあるが，一つを選ぶとすれば，教員養成のシステムだろう。“Research-based teacher education”のもと，最低でも 500 時間の実習で授業力の育成を図り，アクション・リサーチをはじめとしたリサーチで授業改善力をつける。すなわち，practitioner-researcher を育成しているのである。日本でこれができるだろうか。Change!　Yes, we can!　And we must!

21世紀の英語教育と教科書を考える

新学習指導要領で授業はどう変わる？〈リスニング編〉

# 英語教師の特権を活かして

宇都宮大学教授　**渡辺 浩行**

## 1. 小学校英語（活動）からの示唆

これまで，中・高・大生はあるが，小学生を直接指導したことはない（遊んだことはある）。だが，小学校英語との関わりも10年近くに及び，その要がわかりかけてきた（ような気がする）。

集約すると以下の４点になる。

1.英語耳を育てる（豊かな音声インプット）
2.コミュニケーションの道具としての英語
3.子どもの興味・関心・知識・経験を生かした意味のやりとり
4.発話を急がない（強要しない）

つまり，「音声重視で，発話を急がず，子どもの世界に合わせた意味のやりとり（コミュニケーション）の中でのリスニング能力育成」ということになる。中学英語でも欠かせない要素である。

## 2. 新学習指導要領が求めていること

詳しくは，本誌2008年第２号，または文部科学省HPに譲ることにして，リスニングに関わる新学習指導要領の改訂事項をいくつか（乱暴に）抜き出してみる。

「情報を正確に」「内容を（現行版：正しく→）確認しながら」「まとまりのある英語を聞いて，概要や要点を適切に聞き取ること」

これは，相手とコミュニケーションをしっかり取る，ということである。「聞く・話す」だけでなく，書く，読む活動との関連でも当てはまる。

私の解釈では，新指導要領は「コミュニケーション（C）の中でのリスニング」を希求し，「コミュニケーション（C）の外でのリスニング」を諌（いさ）めているのである。

### (1) Cの中でのリスニング

「そんなの当たり前だろう！」と誹（そし）りを受けるかもしれないが，いくつか例を示す。

○教師のsmall talkのリスニング（生徒の笑い，驚き，ときには非難も伴う）
○生徒同士のペア・小グループ活動でのリスニング（上記と同様な生徒，そして教師，の反応が伴っている）
○教材，活動との関連での未聞の英語のリスニング（概要・要点・詳細が必要に応じて聞き取れ，やはり上記のような反応が伴う）

### (2) Cの外でのリスニング

他方「Cの外でのリスニング」とは，次のようなものになる。

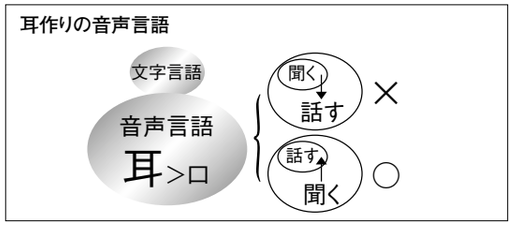
▲教科書の（音読のための）惰性的なリスニング
▲内容が既知のリスニングの大半
▲単語レベル，文脈のない英語のリスニング
▲（発音クリニックをしていない）発音練習のためのオウム返しのリスニング

とりわけ，「Cの外でのリスニング」で避けたいものに，「発話を急ぐリスニング」がある。手を替え品を替えてはいるが，ほとんどの場合，一定の言い回しのリスニングに留まる。教師は，密かに（？），ターゲット表現・構文を生徒に強要している。それらが元気な声で音声化されれば満足なのである。

応用が効かない。したがって基礎の定着にもなりえていない。「Cの中でのリスニング」ではないからである。

### (3) 小学校英語活動の素地をふまえて

下図を私はよく用いる。




文字言語は音声言語を拠り所としている。拠り所のない文字言語の習得はあり得ない。不十分な音声言語，つまり，不安定な拠り所は，脆弱な文字言語の習得・使用の結果となる。

言わずもがなで，音は「耳で聞（聴）いて」，少しずつ「口から出る」ようになる。当然，小学校英語活動では，「アウトプット（話）させるためのインプット」ではなく（×），「英語耳を作るためのインプット」がまず必要なのだ（○）。なんとしても「発話，ましてや文字指導を急ぐリスニング」は回避すべきである。

児童は，「Cの中でのリスニング」を継続して体験することで，意味が聞き取れるようになり，英語耳を持つようになる。「学習指導要領の改善⑪外国語」（参考資料１）では，「コミュニケーション」という言葉が25回も現れ，小学校英語にはその「素地」を育む役割が期待されている。

中学英語はこの素地を受けて存在する。

本物の「素地」を体感してきた新中１を，「Cの外でのリスニング」で「英語嫌い」にしてほしくはない。また，小学校で「Cの外でのリスニング」ゆえに間違った素地を身につけ，英語嫌いの兆しが見受けられる新中１には，「Cの中でのリスニング」でその傷を癒してあげたい。

## 3. 対応するには―実践していない教師の場合

「すでに実践している教師」を校内外に見つけ出し，その教師をまねて学ぶ。様々な指導法やテクニックがあるが，つまるところ，「Cの中でのリスニング」を展開しているかどうかだ。

教師自身が，「Cの中でのリスニング」を率先して実践する。ALTはもちろん，生徒一人ひとりを相手に。すでに生徒とは日本語で行っているわけだから，できないわけはない。

生徒に「Cの外で」のリスニングをさせていたら，素直に悔い改め（？），「Cの中で」に切り替える。小手先の工夫ではなく「その心」を極める。すると，生徒も「その心」に気づき，「その心」を抱き，それを示してくれる。

## 4. 移行措置期間でも取り組めること

例えば*SUNSHINE ENGLISH COURSE 1*, p.28の次の英文の場合，以下のように，一部入れ替えや付け足しをやってみる。

**教科書本文**

Good afternoon, everyone. My name is James Chen. I'm from Singapore. It's a beautiful country. I speak Chinese and English. I'm a college student in Japan. Thank you.

**入れ替え候補例**

morning / my friends / Hoshino Yuriko / Nasu / town / Japanese and Tochigi-*ben* / junior high school / Tochigi

**付け足し候補例**

I like my English teacher, Mr. Watanabe.

生徒にも作らせる。生徒・教師・タレント情報などを扱えばおもしろさも増す。さらに，Q&Aで内容に関するインタラクションへと発展させる。聞き取った生徒から，笑い，驚き，非難（？）の声や反応が出るようになる。２年，３年の最初の授業で再利用してもよい。

また，教科書には絵や写真が満載だ。これを音声英語のインプットに活用する。男子の絵があり，例えばクラスに聡史という名前の子がいたら，“This boy looks like Satoshi. Don't you think so?”と投げかけてみる。“No!”“Yes, yes!”と反応が返ってきたら，“He is cool and Satoshi is cool too.”と続ける。

似ていても似ていなくても，こうして，生徒の一人ひとりをかまってやる。すると，生徒同士がお互いをかまい出す。

それがコミュニケーションではないだろうか。

## 5. おわりに

小学校英語（活動）とつながる好機である。うまくつなげて，新指導要領の「発音と綴りとを関連付けて指導する」「コミュニケーションを総合的に育成する」を授業で実践していただきたい。

自分の授業を見つめ，見直し，英語で生徒とともに「Cの中でのリスニング」を楽しむ。

それは英語教師の特権なのです。

**参考資料**

1.平成20年１月17日中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について⑪外国語」
2.文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/kanren/index.htm

教科書の使い方あれこれ

# 中1 小・中接続のための指導計画

埼玉県深谷市立上柴中学校教諭　齊藤 寛

## 1. はじめに

現在では中学校に入学してくる生徒のほぼ全員が，小学校時代に何らかの形で外国語活動を経験している。そのような状況にあっても，入学時の英語に対する興味・関心は非常に高い。

しかしながら，１学期も後半になると，全体の雰囲気に埋没しているスローラーナーの存在が気になり出す。彼らは教科書を一人では読むことができない。私が平成18年に，県内の中学校１年生544名を対象にして行ったアンケートによると，１学期終了時点で,「教科書を半分以上読める自信がない」と答えた生徒の割合は25%であった。１クラス当たりにすると実に8.5人という数字である。この時期のつまずきは，その後の学習意欲に大きな影響を与えることは間違いない。

我々英語教師は，教科書の内容を発展させたコミュニケーション活動の授業を行うことは当然であるが，教科書の内容をしっかりとマスターさせることも大切であるということを忘れてはならない。なぜなら生徒たちにとって教科書は，英語学習の拠り所であるからだ。

本稿では，小・中接続を考えた場合の教科書の扱い方の実践例を紹介する。

## 2. 具体的な指導計画

入門期指導を10時間程度行って，ゴールデンウィーク前にはProgram １に入るのが一般的な指導計画である。しかしながら，教科書を使うということは，４技能のすべての活動を行うことであり，生徒たちの学習負担は大きい。小学校で外国語活動を経験してきたとはいえ，読むことや書くことへの抵抗は大きい。

そこで，小学校での外国語活動経験を考慮し，教科書を使う時期を大幅に遅らせた。具体的には，１学期を４つの期間に区切り，４技能の言語活動を段階的に行えるように配慮した。１学期の指導計画をイメージ化すると次の図のようになる。

**〈接続期Ⅰ〉**

４月は，挨拶表現や教室英語などを使って，聞くこと・話すことの言語活動を行うとともに，基本的なフォニックスの指導を行った。新学習指導要領にも示されているように，特に入門期においては，発音と綴りとを関連づけて指導することが大切であると考えた。

**〈接続期Ⅱ〉**

５月は，発展的なフォニックスを指導し，英語を読めるという実感を持たせるように配慮した。また，教科書（*SUNSHINE*）Program １～３の言語材料や表現を意味も含めて導入し，文字を介さずに音声のみで言語活動を行った。

**〈接続期Ⅲ〉**

６月は教科書を使い始めた。接続期ⅠとⅡで，教科書を使って学習するための準備を整えた。その結果，文字への抵抗を軽減できたと言える。この時期は音読と読解を中心に学習を進めた。また指導書に付属のリーディング教材を活用し，教科書以外の英文にも挑戦させた。

**〈接続期Ⅳ〉**

７月には，本格的に書くことを始めた。書くことに関しては早急に結果を求めず，１学期に学習した範囲の語や文を夏休みを含めた期間で完成させるように計画・指導した。





## 3. 学習のめあてを明確にする

「教科書で教える」という言葉が示すように，我々英語教師は，教科書の題材や言語材料を使って言語活動（in the classroom）を行い，さらに実際的な言語活動（real world）を行うことが大切である。同時に，初期の学習者に対しては，教科書の理解度の目安を示し，具体的な達成感を味わわせることも大切であると考える。

そこで，１学期の学習案内の中で，生徒たちには次のようなめあてを示した（一部省略）。

（１学期終了時点で）
①教科書の英文が全部読める。
②教科書に出てきた英文を，日本語を見ながら全部言える。
③基本的な英語を聞き取ることができる。
④基本的な複数の英文の意味がわかる。
⑤簡単な自己紹介スピーチができる。
⑥簡単なインタビューに答えられる。

①と②のめあてに関しては，教科書理解に関するめあてである。③～⑥に関しては，日常の言語活動やパフォーマンステストにおける目安である。

そして，具体的な学習案内を次のように示した。

| 月 | 週 | 主な学習活動 | 身につけたい力 | テスト |
|---|---|---|---|---|
| 4月 | 2 | ・英語を聞く<br>・英語を話す | ・英語を聞くこと，話すことに慣れる。 | |
| | 3 | ・学習習慣<br>・アルファベット<br>・フォニクス | ・アルファベットに興味を持つ。 フォニックス練習 | |
| | 4 | | ・家庭学習ができる。 フォニックステスト | ① |
| 5月 | 1 | ・英語を聞く<br>・英語を話す | ・積極的に英語で会話できる。 会話練習 | |
| | 2 | ・単語を読む | ・アルファベットが全部書ける。 | |
| | 3 | | ・英語の質問に答えることができる。 | |
| | 4 | ・英語の質問に答える。 | ・単語が読める。 面接テスト | ② |
| 6月 | 1 | ・英語を読む（理解・音読） | ・教科書が読める。 音読・スピーチ練習 | 中間 |
| | 2 | ・英語を話す（スピーチ） | ・教科書の英文を理解できる。 | |
| | 3 | | ・英語らしく読める，スピーチできる。 | |
| | 4 | ・音に慣れる | ・テストができる。 音読・スピーチテスト | ③ |
| 7月 | 1 | ・英語を聞く，話す，読む<br>・英語を書く<br>・夏休みの課題を決める | ・教科書の内容を聞いて，概要を理解できる。<br>・教科書の英文を正確に音読できる。<br>・教科書の英文を正確に理解できる。 | 期末 |
| | 2 | | | |
| | 3 | | ・１学期のまとめ 夏休みの自主課題決定 | |

## 4. テストについて

以上のように１学期の指導を行ったわけであるが，問題になってくるのがテストである。教科書の使用開始時期や読むこと・書くことの言語活動を遅らせるということは，従来のような定期テストはできないということである。そこで，１学期のテスト計画を指導計画に沿って見直し，次のように行った。

### (1) パフォーマンステスト

①フォニックステスト（４月下旬）
　基本的なフォニックスの読みをテストした。
②インタビューテスト（５月下旬）
　教師の英語の質問に答える形式で行った。
　Program １～３の言語材料を扱った。
③音読・スピーチテスト（６月下旬）
　教科書の音読及び簡単な自己紹介スピーチのテストを行った。

### (2) 定期テスト

| | |
|---|---|
| 中間 | リスニング・アルファベット・フォニックス＋パフォーマンステスト①②の合計 |
| 期末 | リスニング・読解・フォニックス＋パフォーマンステスト③の合計 |

１学期の指導内容や言語活動のすべてがテストに関連し，最終的に教科書の内容理解につながるように配慮した。

## 5. おわりに

１学期が終わった時点で，教科書が読めるかという観点で調査を行った。扱ったすべての英文に関して調べたところ，読める英文が50%以下だった生徒の割合は12%だった。クラス平均にすると4.1人である。決して満足のいく結果であるとは言えないが，一定の成果は出せたと考えている。12%の生徒に関しては，夏休みの補習でフォローしたことも付け加えておきたい。

学習指導要領の改訂に伴い，小学校で外国語活動を経験してくる生徒たちに，中学校での入門期をどのように指導するかを考えた場合，教科書をとおしての基礎・基本の徹底，その後の発展的な活動等を，どのような内容，どのような計画で進めるかが大切な鍵となるであろう。

21世紀の英語教育と教科書を考える

# 自己関与度の高い活動を

静岡県浜松市立清竜中学校教諭　足立 智子

## 1. はじめに

長谷川・犬塚・足立(2006)は，教科書で扱われている諸活動をコミュニケーション活動における「意味」の４つのレベルのどの段階に位置づけられるかを分析し，「生徒が本当に興味・関心のあることを自分の英語で伝え合うタスクを数多く経験させる中で，言語形式を定着させつつ人間形成に資するコミュニケーション活動を行うことは可能である。レベル４の活動を仕組み，実施していくには時間もかかるのが現実であるが，学期に１つでもよいから自己関与度が高く生徒の人間形成に資するコミュニケーション活動ができるように教材研究をして取り組みたい」と提案している。

**「意味」の4つのレベル**
レベル４：人間的な価値のある意味の授受
レベル３：伝達ニーズのある意味の授受
レベル２：場面や文脈に適合した意味の授受
レベル１：記号的な意味の授受

生徒の負担が少なく，かつたくさんの英語を聞き，話し，読むことができるレベル３の実践を紹介したい。使用している教科書は，開隆堂出版の*SUNSHINE ENGLISH COURSE*である。

## 2. 劇化

スクール版CDに収録されている「リズムに合わせて言ってみよう」のコーナーは生徒が大好きな活動で，リズムに合わせてジェスチャーをつけながら元気よく英語を言っていた。コミュニケーションを成立させるためには，non-verbal languageやイントネーションも大切な要素である。劇化することで，「英語も自分を表現する言葉である」という意識を持たせることができ，レベル３の活動になる。与えられた「場面」でセリフを考え(セリフを付け足して)劇化するタスクと与えられた対話文を自分なりに解釈して劇化するタスクに分けられる。

●１年生 Program１終了後(２時間扱い)

International Partyの場面を劇にしよう！

①正しい英語のリズムと発音で話しましょう。自分のセリフは完全に覚えましょう。
②英語のマナーを身につけて劇にしましょう。日本語より大きな声で話す。相手を見て話す。ジェスチャーをつける(握手をする，人の紹介の仕方など)。
③Takeshiは紹介されるまで，どうしているのかを考えましょう。
④会話は，どんどん付け足してかまいません。
⑤もう１人か２人登場人物を加えて，劇を変えてみましょう。新しい登場人物は，紹介されるか，強引に３人の会話に割り込んでくるかどちらかでしょうね。
⑥劇の終わり方も考えましょう。

●２年生 Program６終了後（２時間扱い）

「外国人がやってきた！」の場面を劇にしよう！

あなたは，ハロウィーン・パーティーでポール(Paul)と知り合いました。ポールが友だちのミン(Ming)をつれてあなたの家にやって来ました。あなたとミンは初めて会います。その場面の対話文を作って「劇」にしましょう。

①１人５回はセリフを言いましょう。
②次の表現は必ず使いましょう。
Welcome to my house. / What would you like? / This way, please. / Sit down, please. / Nice to see you again. / Nice to meet you. / Let's (play tennis).
③劇の終わり方は中途半端でもかまいません。

・３～４人のグループで活動する。短冊にセリフをどんどん書き，それらを並べて対話文を完成させ，劇化する。与えられた表現を見て，どんなときに使ったか思い出そうと，教科書を一生懸命に読んでいる生徒の姿が見られた。

●課末「こんなときどう言うの？」を使って

ALTとのTTで，「こんなときどう言うの？」の対話文をデモンストレーションする。その後，生徒は，対話文を覚えて劇化し，準備ができると教師の前で発表する(全員の前で発表するのではないので，内向的な生徒もかなり頑張っていた)。教師は，その場で各ペアのパフォーマンスを採点する。英語とジェスチャーの２つの観点で５点満点。「発想が優れていれば，プラスポイントを与える」とすると，生徒たちはより高いポイントをもらおうと実に一生懸命に考え，練習する。見ている教師も楽しい。複数の教師(ALTや支援員)がいるときにこの活動を行うと効率的である。

class(　　) Student #(　　) name(　　)
Date:
1　On a plane　　飛行機で
attendant: What would you like?　　乗務員：何がよろしいですか？
passenger: Orange juice, please.　　乗客：オレンジジュースをお願いします。
attendant: Here you are.　　乗務員：どうぞ。
passenger: Thank you.　　乗客：ありがとう。
English　/5　Gesture　/5

## 3. 内容理解を意味のある活動に

題材は，よいトピックである。ピクチャー・チャートを使って，内容を一方的に説明するよりも，絵からわかる情報について質問をしたり，質問を現実の世界のことに発展させたりすることで生徒とインタラクションをとることができる。

例えば，由紀がおみやげを買う場面(１年生 Program６)では，This is Ms. Sayama. Is she happy? She doesn't like this fish. But bears like this fish very much. What kind of fish is this? Do you like salmon? Who likes salmon in your family? というやりとりができる。

Pauloが志賀高原でスキーをする場面(2年生 Program１)では，I skied for the first time in 1975. I went to Myokokogen with my friends and teachers. My P.E. teacher taught me on an easy slope. (黒板に2種類の斜面を描いて)Which is an easy slope? I had a very good time. Can you ski? Can you snowboard? Who can ski in your family? Where do you usually ski? Where is Shigakogen? Is Paulo a good skier? Is she Paulo's sister?などのやりとりができる。

齋藤先生のボランティア活動(３年生 Program５)では，What does Mr. Saito teach? Look at the blackboard carefully. They are waiting for a bus. How long can you wait for a bus? Do you think "Tenkyu" (*トクビジンで"Thank you."の意) is English? などのやりとりができる。

この後２，３年生にはワークシート(下図参照)を使って，内容理解を深め，本文に関する英問につなげていく。題材によってはDo you want to buy this red car?(２年生 Program９)のような発展的な質問を投げかける。ほとんどの生徒は「環境にやさしいので買いたい」と答えるが，「高いので買えない」と答えた生徒もいて驚かされた。

Program 9－Ⅲ
Let's listen　聞きとれた単語に○をしよう
look, car, amazing, why, normal, does, but, isn't, mean, that, more, interesting, pollute, really, doesn't, gas, doesn't, engine, but, how, move, good, question
Let's read
① A normal car doesn't pollute the air. (　)
② That red car doesn't pollute the air. (　)
③ That red car doesn't need gas. (　)
④ A normal car doesn't need gas. (　)
⑤ A normal car has an engine. (　)
⑥ That red car has an engine. (　)
Do you think that red car is interesting?
Why do you think so?
words　poll_t_ (汚す)　_s_ (魚)　m__n (意味する)　S__ (海)　ci____ (もの・でない)　bro____ (兄弟)
文を作ろう
_____ is more interesting than _____.
_____ is more useful than _____.

## 4. おわりに

昨年度，前任校の１年生には，定期的に１人ひとり本文の音読チェックを行った。講師の協力もあり，８割の生徒が Program９まで合格し，さらに活動に意欲的に取り組むようになった。また，副教材を使って継続的にフォニックスを指導した。この２つを組み入れるために，あきらめた活動も多かったが，２年生以降でレベル４の活動ができる力はつけることができたと思っている。

**参考文献**
長谷川和則・犬塚章夫・足立智子(2006)「中学校英語教科書の分析(その１)―諸活動は意味あるコミュニケーションのどの段階にあるか―」犬塚章夫・三浦孝編著(2006)『英語コミュニケーション活動と人間形成』成美堂

# 本文から授業を創造する

大分県中津市立三光中学校教諭　羽野 祐司

日常の授業で教科書本文をどのように扱っているでしょうか。学年によってその扱い方には違いがありますが，本文をいかに扱うかが英語の授業をどうつくるかにつながると思います。

## 1. 本文を軽視してはいけない1年生

中学校１年生の教科書であっても，単語一つひとつの使い方や表現法などを軽視してはいけません。生徒にとっては教科書に出てくるすべてのことが新しいはずですから。教師が本文を丁寧に扱うことで学習に対する安心感が生まれます。事前に十分な検討をして，どこに説明の重点を置くかをしっかり考えておく必要があります。

例えば，同じHow about ～?の表現でも，*SUNSHINE ENGLISH COURSE 1*, Program 4 - 2 の“How about you, Takeshi?”と 4 - 3 の“How about Ms. Takahashi?”では，後者は何かを提案するときの言い方であることを説明します。forの使い方でも，Program 6 - 2 の“This baseball cap is for my father.”と 6 - 3 の“This place is famous for its sunset.”では，明らかに意味が違います。このようなところを生徒の立場に立って丁寧に扱います。あまり説明的にならず，生活に関連した他の例を示しながら理解させることがその後の学習につながると思います。

## 2. 別バージョンで1年生の本文を活性化

１年生の本文は語彙も限られた中で，それのみの学習に終わると生徒も飽きてきます。しっかりと本文を理解し音読をした後に，別バージョンの本文で練習すると生徒の目が輝いてきます。

**例：1年生 Program 3(-3) シンガポールからのお客さん**

A: What do you eat in Japan?
B: I eat *tempura*.
A: What kind of *tempura* do you eat?
B: I eat *nigauri* tempura.
A: *Nigauri* tempura! Is it good?
B: Yes, it is. But it's bitter.

教科書の本文を下線部のように変えました。「日本に来たチェンさんがニガウリの天ぷらを食べる」という話題に変わりました。

**例：1年生 Program 6(-1) シアトルでの1日**

A: Look at that mountain. That's Mt. Hachimen.
B: It's really beautiful. Let's take a picture.
A: Do you see the soccer stadium over there? That's Sanko Sports Park.
B: Oh, I know the name. Do you like soccer?
A: No. But my sister Emi loves it. She often plays soccer with Kayo.

下線部は，地域の山や施設の名前，生徒の名前です。身近な内容に変えることで生徒の目の輝きが違ってきます。時には生徒に自由に単語を入れ替えさせ，ペアで発表させると盛り上がります。

また，音読の際も，「役者になろう」と呼びかけます。例えば，6 - 3 でアンディーと由紀が夕日を見ながら語るところは，「アンディーと由紀はなかなかいいムードだね」と言って，教師の一人芝居で（ALTがいるときは二人で）ムードを出して演じます。生徒にも，「恋人同士になったつもりで練習しよう」と呼びかけます。

## 3. オーラルで教科書の本文を紹介し，授業で英語を多用するきっかけに（2，3年生）

「英語の授業で英語を多用する」―なかなか難しいことですが，教科書の本文の内容に入る前にピクチャー・チャートを使いながら口頭であらすじを説明する方法は，生徒を多くの英語に触れさせるよい機会となります。しかし，教師が完璧な英語を使おうと意気込むとなかなか長続きしません。あらすじとして何が大切かを自分なりにとらえて，自分なりの英語でノートに書いておきます。それにしたがって，話すときは堂々と自信たっぷりに生徒に英語で語りかけるのがよいと思います。





**例：２年生 Program 7（-2） Reach for Your Dream**

Mr. Kawai is a good swimmer now. But when he lost his sight, he couldn't swim straight. Then his friends helped and encouraged. He practiced hard. Finally he became a gold medalist.

その後に，英語で質問します。

・Is Mr. Kawai a good swimmer now?
・Could he swim straight when he lost his sight?
・Who helped Mr. Kawai?
・What color of the medal did he get?

先に質問を言い，その後で生徒に指名して答えさせますが，その際，すぐ答えられないようであれば，YesかNoで答えられる質問に変えて，何とか答えを引き出します。このやりとりは，授業で英語を多用することにつながります。

## 4.「英語学習とは何か？」に迫る授業を

本誌『英語教育』Vol. 60- 2 で鳥飼玖美子先生が「英語で何を伝えるのか」と外国語学習の目標を再考することを投げかけています。コミュニケーション重視の英語教育が叫ばれて久しいですが，学校で行う英語教育は単なる道具としての英語教育であってはならないと思います。*SUNSHINE ENGLISH COURSE*の題材には，英語学習を幅と厚みのあるものにする内容がたくさん詰まっています。実践例を紹介します。

**例：3年生 Program 5 Working as a Volunteer**

齋藤先生が現地の言葉を使って，現地の人々と心を通わせ，国際協力に尽力しているという内容です。5 - 3 の本文に，“We should learn English as an international language. But it is also important for us to learn the language of the local people.”とあります。この言葉は私たち英語を学習する者にとって，とても重みのある言葉だと思います。すなわち，私たちは「英語＝国際語」として大手を振って世界の様々な言葉を駆逐するのではなく，それぞれの土地の人々の生活につながる言葉を大切にし，人を大切にしなければならないということを教えてくれています。私は本文の学習をしながら，英語が世界に広がった理由に植民地支配があることにも触れました。そして，インターネットで見つけたピジン英語の会話を印刷して生徒に配り，片言ながら生徒と一緒に声を出して読んでみました。

**例：3年生 Program 6 Okinawan Music**

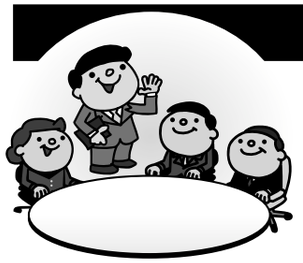
沖縄の音楽の特徴が紹介され，さらに宮沢和史さんがどんな思いで「島唄」を作ったかが紹介される内容です。しかし，6 - 2 の本文の“The song expresses a special message through its words ― a wish for peace.”を本当に理解するためには，なぜ沖縄をとおして平和の願いなのか，「島唄」の歌詞がどんな意味を含んでいるのかの２つを教師が補う必要があると思います。

私は，本文を読んで意味を把握した後，沖縄戦について生徒とともに学習しました。沖縄の高校の先生が書いた絵本*A Letter from Okinawa*を読み，沖縄戦を記録した写真集を見せました。生徒からは，「沖縄でこんな悲惨なことがあったことを初めて知った」「今の私たちの平和な生活に感謝し，周りの人の命も大切にしたい」という感想が聞かれました。そして，「島唄」の歌詞の意味を*Teacher's Manual*から転載し，生徒に配り，「島唄」をともに聞きました。

教科書教材をとおして何を学ばせたいかを教師自身が持ち，それを生徒とともに学ぶためにはどのような補助教材が必要かを考え，準備し（*Teacher's Manual*も大いに役立つ），情熱を持って授業に臨むことが大切だと思います。

上記の例以外に私が内容を深めようと大切に扱ってきた題材は次のようなものです。

・**2年生 Program 4 With Love and with Joy**
　マザー・テレサの活動の様子を伝える写真集を見せ，何のために人を助けるのか，命の尊厳について考えさせる。
・**2年生 Program 7 Reach for Your Dream**
　河合純一さんの著書から一節を紹介し，彼の明るく強い生き方や周りの人々との関わりの大切さを知らせる。
・**3年生 Program 3 Don't Ask Me That Question**
　ALTに日本での体験談をつづってもらい，それを英語通信で紹介し，異文化を体験することや互いを理解することを身近な人から学ばせる。



# 私の授業実践報告

山梨県甲斐市立竜王北中学校教諭　**佐野 周治**

## 1. 日々の授業の中で大切にしていること

☆中学1年の初期段階から育てることが大切

・規範意識を育てる（聞くときは聞く）。
・学習習慣（家庭学習）の定着を図る。
・できるだけ多くClassroom Englishなど英語を用いて授業を展開する。
・１対１，ペア，グループの言語活動をとおして互いの人間関係を深める。
・生徒の「気づき（推測）」を大切にし，学習意欲を高めるため，ALTとの協働による言語活動の工夫改善を目指す。
・できたら大いにほめる。

## 2. 生徒の「確かな学力」を育むための授業

**題材：***SUNSHINE ENGLISH COURSE 2,* Program 3-1

**授業内容：**基本文の導入～展開。

**授業形態：**一斉授業（34人クラス），ALTとのTeam Teaching

次の点に考慮して，授業を行った。

・４技能の総合的な育成！
・知識・技能の活用を図る言語活動の充実！
・文法事項について「言語活動と効果的に関連付けて」指導する！
・生徒のつまずきやすい内容等について確実な定着を図るため，繰り返してスパイラルに学習する機会（Feed Back）を充実させる！

ALTとのTeam Teachingの場合は，できるだけ自然なsituation（場面）を設定し，ALT，JTE，生徒の間でのTriangle Interaction（三者の対話）を使った言語活動の導入を考える。その際，絵，写真，実物等を用いて，生徒に言語活動の場面をしっかり英語で説明（日本語は必要に応じて補助的に）したうえで導入する。ここで特に大切にしたいのが，生徒のGuess（推測）を生かした「気づき」である。

（カレンダーを黒板に提示しながら……）
*JTE:* Now we'll introduce today's new material to you. It's very important for you. Listen to our conversation carefully and guess its contents. 特に聞き慣れない英語表現は何か，またその表現は日本語でどんな意味か聞き取りましょう。
Hi, Paul. It's Friday today. <u>What are you going to do tomorrow?</u>
*ALT:* <u>I'm going to go shopping with my friends.</u>
*JTE:* OK Class, how do you say "go shopping" in Japanese? For example, I often go shopping at ***Ito Yokado***.
生 徒：買い物に行く。
*JTE:* Let's make a sentence, everyone.
生 徒：We say "***kaimono-ni-iku***" in Japanese.
*JTE:* That's right. He's going to go shopping with his friends tomorrow.（生徒に伝える）
*ALT:* What are you going to do this Sunday?
*JTE:* I'm going to clean my house.
*ALT:* Oh, that's too bad.（ある生徒に）What are you going to do tomorrow?
生徒*A:* I'm going to play soccer.（play soccerでもOK）
*ALT:* Very good!
*JTE:* What are you going to do this Sunday?
生徒*B:* I'm going to watch TV.（watch TV でもOK）
*JTE:* Good job!

～次の順序で展開に移っていく。～

①音から本時の基本文に慣れさせておき，聞き慣れない英語表現（基本文）と日本語の意味をVolunteersで答えさせる。Sentence Cardsを板書する（上の対話文のアンダーラインの文）。
②Grammatical Pointsを生徒とコミュニケーションを図りながら説明し，何度も音読練習をし，Pattern Practiceを行いながら定着を図る。
③教科書のLet's Try（p.25）を練習する。板書をノートに取らせる。ノートを取っている間に，用意しておいたLet's Tryの絵カードを使って，教室をsplitし，ALTとともに一人ひとりの生徒にそのカードを１枚引かせてQ&Aを行う。
④*Teacher's Manual*の中の『基礎徹底ワークシート』を用いて基本文の基礎・基本の定着を図る。

英語教師の裏ワザ

# データを取ろう

東京都港区立赤坂中学校教諭　北原 延晃

**1. はじめに**

全国学力調査結果のことで各県が揺れている。ある県では教育委員会から「小テストをどんどんやれ」という指令が降りてきているそうだ。単語テスト，計算ドリル，漢字テスト…どれもその効果をまったく評価しないわけではないが，本格的な学力向上につながるとは到底思えない。一方で「授業改善」というかけ声もよく聞かれる。では何をめあてにして「授業改善」をするというのだろう。今回は生徒の学力を確実に上げるための「授業改善」の手法について書きたい。

**2. 自分の授業を科学的に分析しよう**

授業改善の第一歩は自分の授業を客観的に知ることである。そのためには自分の授業ビデオを見たり，研究授業をすることが不可欠であるが，そのほかにデータを取ることがとても大事だと思う。問題はどういったデータを取るかということである。以下は私のこれまでの長年の実践で取った手法である。参考になれば幸いである。

**3. データのいろいろ**

**①生徒のアンケート**

二十〜三十代のときには，よく生徒にアンケートを取った。読者の先生方もよく取られる手法だと思う。私の場合は毎学期末に授業のすべての活動を「楽しかった」「楽しくなかった」，「ためになった」「ためにならなかった」という２つの座標軸でアンケートを作成した（詳しくは英検HPにてSTEP Bulletin ＃7を参照されたい）。

**②定期テスト，ディクテーションテスト**

得点はもちろんだが，writing問題は答案をコピーしてエラー分析し，さらにどういう英文を友だちは書いたのか参考にさせるために印刷して配付する。

**③外部テスト**

英検や東京都中英研作成コミュニケーションテストなどは領域や技能ごとにデータが出るので重宝している。

**④個人カルテ**

学期のすべての評価項目を個人カードに転記し，評価Ａにはピンク，評価Ｃには緑のマーカーを塗る。個人のプロフィールを通じて学年全体の傾向が読み取れる。

**⑤生徒のパフォーマンスビデオ**

Speaking Testでは必ずビデオを撮っておき，評価に使うほか，自分の指導の足りないところを発見するのに使う。撮ったビデオは次の学年に見せることによって，生徒にイメージを持たせ，目標を与えることになる。

**⑥学期末の反省**

「できるようになったこと」「先生にほめられたこと」などをプリントいっぱいに書かせる。文章表記だが，たくさん集まれば立派なデータになる。自分の指導がそのまま表れるので一番よいデータだと思う。以下，例をあげる。（　）は私の指導内容である。

- 英会話がなめらかにパッと言えるようになった。（クイックQ&A）
- 日本語を英文にするのが得意になった。というのもEnglish Express（*スパイラルワークシートのこと）で繰り返し出題される表現を覚えてきたからだと思う。
- 英検3級のリスニングは9割正解と，とてもよかった。（自作教材 “Listening Training -Powered-”）
- 発音がよくなったと思う。（日々の発音指導と音読テスト）
- 不規則動詞，比較級・最上級がわかるようになりました。（文法指導）
- 期末テストの点取り放題の問題で，たくさん点数をかせげたこと。（ライティング指導）
- 作文ができるようになりました。（ライティングノート）
- 長文問題など読むことが得意になりました。（英字新聞を使ったreading活動）
- ディクテーションノートをつくる時に辞書を使うようになって辞書の使用頻度が増えた。（辞書指導）



連載 小学校で英語が始まった！

# 第1回 小学校英語の現状

北海道教育大学札幌校教授　萬谷　隆一

**1. はじめに**

中学１年の４月，まだ幼さの残る新入生は英語という新しい教科に取り組みます。「この時期のフレッシュさがたまらない！」という先生もきっと多いと思います。未知の外国語に初めて出会って無邪気に喜ぶ生徒たちに触れて，まるで水先案内人のような，やりがいと責任感を実感し，「これこそ英語教師冥利に尽きる」と感じてこられた先生も多いことでしょう。

しかし，小学校で英語が始まると，その水先案内人の役割のかなりの部分は，小学校の先生が担うことになるのです。「おいしいところを持ってゆかれる！」と，お嘆きの方もおられるでしょう。今までと同じ考え方で教え続けると，もしかしたら小学校英語を経験した子どもたちに「また小学校時代と同じ活動をするなんてつまらない」とか「中学校英語は文法やテストばかりでつまらない」という誹（そし）りを受けないとも限りません。

しかし，確かに「おいしいところ」の一部は小学校に譲ることになりますが，決して中学校英語から「おいしいところ」がすべてなくなるわけではありません。小学校英語とは異なる，中学校英語ならではのよさ・喜びがあるはずです。願わくば，小学校英語が育むものを引き継ぎ，生徒たちの英語を「新たなステージ」に導く中学校英語でありたいものです。そのためにも，中学校英語の役割を「再定義」しなくてはなりません。そういう時代が，もうすぐそこまで来ているのです。ぜひ小学校英語を「対岸のできごと」と言わずに，小学校で何が起ころうとしているのか，そして中学校でそれを受けて何をなすべきかを考えていただきたいと思います。それを考えるための材料を提供するのがこの連載の意図です。

**2. 小学校英語活動の現状**

多くの小学校では，平成23年度春からの５，６年生の外国語活動（英語活動）の実施に向けて，急ピッチで準備を始めています。指導の頻度はまだ多くありませんが，平成19年度で97.1％の実施率ですので，ほとんどの小学校で何らかの外国語活動が行われていることになります。ただし，特区，研究開発学校，拠点校など一部の小学校を除いて，多くの小学校はまだ月に１回以下のペースが大半です。あと２年で完全実施（週１時間，年間35週）ということで，段階的に時間数を増やす計画を立てている教育委員会も多いようです。

最も急務なのは，教師の研修です。なにせ「まさか自分が英語を教えることになるとは思っていなかった」という小学校の先生が多く，各地で多様な研修や研究会が開かれています。お隣の韓国では小学英語導入に合わせて120時間の研修が義務づけられたことからすると，はるかに不足していることは明らかです。ただ，国レベル，地方レベルで様々な研修が計画的に進められていることは確かで，全国５ブロックでのいわゆる主事講習（５日間），自治体レベルの研修，地域ごとに約40校に１校の割合で指定されている614校の拠点校が主導する公開授業や研修（文科省「小学校外国語活動サイト」参照），各学校の校内研修などが，現在，全国的に進行しています。

さて，英語指導に欠かせないのは教材ですが，小学校外国語活動では国から『英語ノート』が配付されます。この『英語ノート』は，外国語活動（英語活動）が「教科」ではなく「領域」であるため，教科書とは違い，必ず使わなくてはならないものではありません。しかし，国レベルで一定の水準を保つ必要があるとの判断から，全国の拠点校に配付されました。総合的な学習の時間の一部であった今までの外国語活動では，実践内容は各学校の裁量に任されており，学校間格差が生じる懸念が出てきたためです。『英語ノート』は21年度の全小学校への配付を目指して，準備が進められています。今後は，この教材をどう使うか，そのサポートやアイディアが必要になってくるでしょう。

次回は，中学校英語と比較しながら，小学校英語の特徴について考えたいと思います。

**Web情報ソース**：文科省「小学校外国語活動サイト」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gaikokugo/index.htm

# 絵(ピクチャーカード)を用いての場面作り

山梨県笛吹市立浅川中学校教諭　**風間 謙**

## 1. 英語の表現と場面

英語の表現を使うとき，そこには必ずその表現を使うべき場面が存在します。どんな表現でも場面と切り離されたものはありません。教室で新しい表現を学習するとき，また，その表現を用いてコミュニケーション活動を行うときでもそれは同じことです。本当の意味でその表現を身につけたかどうかは，その表現を使うべき状況で使えるかどうかであるということからも，表現と場面は切り離せない関係にあると言えるでしょう。そこでどのように表現と場面を結びつけるかということが問題になってきます。ここでは，補助教材である絵(ピクチャー・カード)を使って場面設定をする際に留意することについて考えてみました。

## 2. 補助具としての絵

ご存じのように，補助具としての絵は，英語学習の多くの場面で役立ちます。特に，生徒たちの関心を引きつけるプロップの一つとして大きな役割を果たしていることは誰もが認めるところだと思います。さらにそれが自分たちの英語の先生が書いたものならなおさらでしょう。

教室では，学年が進むにつれ，英語学習に対してやる気がなくなってしまう生徒が出てきてしまい，我々教師を悩ませますが，そんな生徒に頑張ってもらいたいと考え，試行錯誤している先生方も多いことと思われます。そういった場面で絵を用いることで，普段は「英語なんて…」と斜めに構えている生徒でさえ，教師の描いた絵に，程度の差こそあれ，興味を持ち授業に取り組んだという経験をお持ちの方も多いでしょう。私もそのような効果が期待できる「絵を用いての場面作り」を授業に取り入れている一人です。

## 3.「絵」は口ほどにものを言う!?

補助具としての絵について考えた場合，市販品を使うことも考えられます。得意不得意はあるでしょうが，自分自身で描くことで，手描きならではの自由度を最大限に利用することができます。また市販されているものよりも状況や話題にしたい場面を絞り込むことができるので，より多くの場面で使用できるという利点があると言えるでしょう。何と言っても，絵を使う最大の利点は，「『絵』は口ほどにものを言う」とでも言いましょうか，状況の説明が簡単で済むということです。学習が進むにつれ，場面や状況が複雑になります。複雑になればなるほど，教師からの日本語による説明が多くなってしまう傾向がありますが，そんな場面で絵を使えば，日本語の説明に多くの時間をかけることなく，英語を中心としたインタラクションの多い授業を展開することができます。そしてこのことは，見るだけで状況をつかませることができるので，生徒を英語に集中させ，生徒からの発話を引き出すこともでき，ひいては「英語を聞いてわかった，英語を話して通じた」というような自信を持たせることにもつながっていくと思われます。

## 4. どんな絵が相応しいのか，どんなポイントが大切か

興味づけという面からは，どのような絵でもある程度は役割を果たすことができるでしょうが，より高い効果を求めたり，継続的な利用の際にはいくつか配慮する事柄が考えられます。例えば，状況や場面が生徒にとって馴染みがあり，親しみやすいものであるか，生徒たちにとってある程度の難易度があるか，設定状況を複雑にしすぎてはいないかなど。

また，特に重要なこととして，絵を描く者にとっては，どのような絵にしようかと考える際に，どんな場面で使うのか，どこに焦点を当てるべきか，どんな前後関係が相応しいか，について十分に考えることが求められます。そしてそのことは，その表現の文法や語法だけでなく，その背景となっている文化など，言語の本質を見つめることにつながり，よりよい教材を生み出すことにつながっていくのだと思います。そしてそういった段階や手順をしっかり踏むことで，補助教材としての絵の特質を最大限に発揮させることができるのだと考えます。

## 5. 絵を用いた場面作りの一例

ここでは，助動詞を復習する授業の例を紹介したいと思います。助動詞は英語の中でも話し手の気持ちを細かく表したり，表現の幅を広くするうえでとても大切な役割を担っています。そしてそれは，単なる意思疎通に留まらず，相手に対する細かい感情を伝え，それと同様に相手からの細かな気持ちを受け取るという，より高度なコミュニケーション活動を成立させています。しかし，多くの授業での扱いでは，それぞれの表現における微妙な語の働きを比較して学習するようになっているとは言えないのではないでしょうか。そんな助動詞ですが，その役割の重要度を考えて，補充・深化・発展を目指す選択授業の場面で，復習という形で学習を行っています。

助動詞を用いた表現では，主語が変わるだけで意味や役割が大きく変わります。表面上は小さな変化でもコミュニケーション上では大きな変化になっていることに学習者は気がつかなければなりません。その形と日本語訳を機械的に暗記していく方法では，なかなか使えるようにはならないでしょう。そこで，今回の授業では工夫の一つとして，自作の絵を用いて，状況とともに身につけていこうと考えました。第一次としてCan I...?, May I...?, Shall I...?, Shall we...?, 第二次としてWill you...?, Can you...?, Would you...?, Could you...?等の表現をターゲットとして進めました。

型や意味といった表現そのものの学習をした後，言語上の働きに注目し，どんな場面や状況で使うのかといった学習を絵とオーラルイントロダクションを交えながら確認していき，その後いくつかの場面で生徒自身が登場人物になって表現していくことで定着を図り，最後に書く活動をとおしてターゲットとなっている表現をまとめて授業を終えました。その中の一部分を紹介します。

ある場面を示す絵(右)を提示し，絵についての質問をいくつかした後，状況を説明・確認していく。

※（　）内は生徒の反応。

> Now everyone, look at this picture. This is a thermometer. Is it hot or cold in this room? (It's hot.) Look at this man. He's hot. He's sweating. His face is red. What do you think he's going to ask him? (Will you open the window?) That's right, very good. OK, let's go to another situation. This man at the desk is your principal, ***kocho-sensei***. So what would you ask him then? What do you think he's going to say to him? (…) さっきの表現よりもう少し丁寧な表現があったよね。(Would you open the window?) That's right! Now let's move on. What would you say if you are a principal? What do you offer him? He's very hot and sweating. And you're sitting by the window. What do you say to him? You know what to say in Japanese. (…) 日本語では？(窓を開けましょうか？) You know that expression in English too. (Shall I open the window?) Yes! That's right! Shall I open the window? Yes, please.

以上のように，絵を用いて生徒とのインタラクションを交えながら状況を確認し合い，言語の働きやどんな場面での表現か，を学習した。

この他にも絵を使った授業を行っていますが，生徒たちからは場面を意識しながらそれぞれの表現を運用している様子が見られています。今後も絵を用いた場面設定という方法にさらに工夫や改良を重ね，他の多くの場面でも応用していきたいと考えています。

英語教育時評

# 心に残る授業

### 思い出の中の英語

年に何回か，卒業して二，三十年になる卒業生たちと会い歓談をしながら，元気を促し合うことがある。そんなときしばしば話題になるのが，思い出に残る英語の授業や教師のことである。

そこでは，皆，うろ覚えの教科書の内容や章句を口にしながら，往時の思い出へと盛り上がっていく。例えば，オー・ヘンリーやヘミングウェイの短編の様々な場面を思い出しながら。また，『幻の女』の冒頭の〈夜は若かった，そして彼も若かった〉とか，『長いお別れ』の〈店は体温が下がっていく音が聞こえるほど静かだった〉などといったお洒落な一節を口にしながら。

そして最後は，若い頃に，もっと実践的な英語の運用能力を体得しておけばよかったという，繰り言になっていく（そして，もっと広い一般教養を身につけておけばよかったという後悔に）。

### スキルの習得

英語をはじめ，あらゆるスキルの向上に際して，何よりも肝要なことは，学び手の動機と目標，そしてその習得にかける密度の濃い時間であろう。

女優の藤原紀香さんは，日本赤十字大使としてアジア，アフリカの戦禍や災害に苦しむ人々の援助活動に精力的に打ち込んでいる。そんな彼女は，多忙なスケジュールの間にも，「日々，英語の勉強はずっと続けている」という。そして，さらに「英語だって，帰国子女じゃないし，留学もしたことがないから，自分でやらなきゃしょうがないと思うし，ダンスだってこの年になって…始めるわけだから，ちゃんと目標を決めてグーッとやらなきゃだめだなと思います」と語っている（『週刊朝日』，2008.10.31）。

筆者の友人の中にも，五十代半ばになって会社勤めを辞め，かねてから思いを抱いていた書道に赴き，以後何年にも渡って毎日十六，七時間も書に打ち込む月日を経て，今日優れた書家になった人がいる。

このように，学び手は意欲さえあれば，自ずと相当のことができるのである。だとすれば，教師は，単に知識や方法を伝えるだけでは不十分であろう。彼/彼女は，学習者が「ちゃんとした目標を決め，日々グーッとやる」意欲や情熱に火を点ける，介添えをしなければならないであろう。

### 大工の棟梁 ― 木の心との対話

大工の棟梁は家を建てるときに，使う材木をじっと見て，「木の命，木の心と対話をしながら仕事をする」という。また「建物はよい木ばかりでは建たない。日陰に育ったどうしようもない木も，日当たりの悪い所に組み合わせると，やがてよい木材になる」という（『そして，風が吹いた』，NHK出版）。木を生かし伸ばすためにも，その心や個性を見て取り，生かすことが必要であるらしい。このことは，人間の能力を生かす観点からも，示唆するところが大きいのではないか。

### 人間を相手にした大工の棟梁

教師は人間を相手にした，大工の棟梁のような者でありたい。学び手や教材をじっくりと見て，それらの心や命と対話しながら，それぞれの資質を伸ばしていくのである。そうすれば，学び手はやがてよい人材になるだろう。また，そのような授業は，いつか人の心に残る授業にもなることだろう。

（明治大学教授　池内 正直）

**投稿を歓迎します**

英語教育に関する問題提起，実践報告，研究などの投稿をお待ちしております。締切は特にありませんが，本誌は今後，3月，5月，9月，2010年1月にそれぞれ発行の予定ですので，原稿到着の時点で掲載号を決めさせていただきます。規定は以下のとおりです。ご不明の点は編集部までお問い合わせください。

① 22字詰×72行以内（本文分量）
② 二重投稿はご遠慮ください。
③ 採用分には薄謝を進呈いたします。